
UNBALANCE

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UNBALANCE

【Nコード】

N1621J

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

この物語は二次元に恋をしてしまった愚かな

三次元の少年が主人公の物語である。

作者のこととか言われそうですが別にそんな事はないわけでもないですw

取り敢えずアーたんは俺の嫁！

不定期更新ですが頑張ります！

ブログ（前書き）

2012/12/30 全面改定。

これから更新頑張っていきます！

目標は毎週一話です！

プロローグ

この世にはどうにもならない事が幾つもある。

例えば貧富の差であつたりだとか戦争だとか紛争だとか
そういう堅つ苦しい物もあるが、私が言いたいのは
そついった物ではない。

では何が言いたいのか――

それは次元の差である。

ここで説明しておきたいのだが
我々の世界には二つの次元が存在している。

一つは三次元。今、我々のいる世界が三次元である。

もう一つは二次元。簡単に言えばアニメ、漫画、ゲームの世界である。

ようするに行けない。

ホントの事言うともう一つある――というよりは作られる――が
君達がこの文章を読んでいる時にはまだ作られていないから
まあ良いでしょう。

そして、この物語は二次元に恋をしてしまった愚かな
三次元の少年が主人公の物語である。

なんて書くと阿呆かと言われそうだが、この少年は

色々不幸を呼び込む性質を持っているらしく
簡単に言つと綾崎ハ。テみたいな人なのだが
もっと重いんです。

そんな訳でギャグ小説家と思われそうですが
めっちゃシリアスな小説をお楽しみいただけたら幸いです！

2010 / 12 / 30 夢幻

プロローグ2 混沌（前書き）

【語り手】カオス・ネクロフィア

いやはや、一日でまさかの2話投稿。

僕としては、今日中にプロローグを完結させたいのです。

ちなみに、プロローグは全5話です。

後、アルカディア王国の將軍とか、位が今いち分かりづらいかと思いますが、ホムペの方で解説していこうと思っています。

それでは、どうぞお楽しみ下さい。

プロローグ2 混沌

俺の名前は、カオス・ネクロフィア。

年齢は19歳、国の騎士をやっている。

この国の名は、アルカディア王国。

世界でも一番大きな国だ。

先程も、言った通り、俺は国直属の騎士である。

“第一戦闘部隊”の隊長である。

主な仕事と言えば、モンスター退治であるが、
極希に、物凄い任務に駆り出される事がある。

例えば、戦争だ。

今まで、この国は、3度戦争を経験している。

俺が駆り出されたのは2回目からだった。

戦争っていうのは、惨たらしいものだ。

良い事なんてありやしないんじゃないか？

でも、戦争は無くならない。

今日の朝、俺はそんな事を考えながら、そろそろ、城に行くか、と思いドアノブを回した。

Year	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099
1990	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099

開かない。

ドアが開かない。

いや、ドアノブは回るぞ。

だが、ドアが開かないのだ。

押しても引いても駄目だ。

「全く……此処はぼろいからな……。」

俺はそんな事を口にした。

確かに、此処はぼろい。

俺が住んでいる所は王国の戦士達が住む下宿所の302号室だ。

此処は、初めて建てられたのが、今から2000年程、前である。

それ以来、1回しか、建て直しをしていないらしい。

ふざけるな。

まあ、最悪ドアをぶち破ればいいしな。

俺は一応、王国で、3番目に強い騎士である。

一番強いのは、ガルス・ブイラゴン。

“王の右手”とも呼ばれる、“第一等指揮政官”である。

その強さは、王国を一人で潰せるとかで、物凄い噂が立っている。

2番目は、アルティ・ファイナ。

こちらは、“將軍”である。

・・・って、そんな事を解説している場合じゃない。

さあ、ぶち破るぜ・・・！

「オラアアアアアアア！！」

俺は、愛用の剣“ロングソード”を頭の上に掲げ、
ドアに向かって振り下ろした。

- - - - -
- - - - -

閉じこめられてから、5日経った。

結局、出れてないんだな、これが。

ちなみに、剣は何故かドアに負け、折れた。

何で剣が木製のドアに負けるんだよ？

で、今日朝起きてみたら、いきなり窓が光り出してた。

あ、何で俺、窓から脱出しようと思わなかったんだろ。

何てったって、此処は1階だぜ？

ああゝ2階じゃなくて良かった・・・。

って、待てよ。確か、この間、窓から出ようとしたな。

だけど、開かなかったから、拳でぶち破ろうとして・・・無理だった。

もちろん、ガラスの窓だぜ？

それにしても、何で光ってるんだ？

しかも、窓、開いてるし。

誰かが、外から開けてくれたのだろうか・・・？

いや、鍵はもちろん内側だし、鍵を動かそうとしても動かかなかったしな。

まあ、今はそんな事はどうでも良い。

早く、この部屋から出よう。

そして、俺はこの部屋から飛び出した！

プロローグ3 天空（前書き）

【語り手】セイヴァー

毎度同じネタですみません。WWW
このネタが後、1話続きます。WWW

プロローグ5だけは違う話になる・・・筈です。
それでは、どうぞお楽しみ下さい。

プロローグ3 天空

俺の名前は、セイヴアー。

本名は違うが、本名なんざ、とうの昔に捨てたさ。

年齢は17歳、職業は・・・ない。

母国を出てからというものの、ロクな職業に就いた事がない。

だから俺に職業はない。

最近盗みを繰り返している。

最低の人間と言われてもおかしくないかも知れないな。

今は、路地裏で生活をしているが、昔は超豪華な豪邸で暮らしていた。

今とは比べものにならない。正直な。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

さて、ある日、俺は金が落ちているのを発見した。

安い額だったので、拾ったままにしておいた。

第一、今俺が居るのは、治安のちの字もない、酷い町である。

窃盗なんて当たり前、殺人なんて、どんとこいだ。

折角なので、その金で宿に泊まる事にした。

302号室であつた。

ベッドで寝るなんて、何年振りだろうか……。

何て事を考えている内に俺は深い眠りに落ちた。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

開かない、
ドアが。

「仕方ない……。」

俺は腰にかけてある剣を手にとった。

愛用の剣である。

俺が家出した時から、愛用しているから、かれこれ何年になるんだろうか。

計算するのも面倒くさい程だ。

この剣で俺は、様々なものを斬ってきた。

モンスターが主だが、時には・・・。

俺は手に剣を握ると、扉に向かって剣を振り下ろした。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

どうやら、見えない壁で覆われているようだ。

俺は魔法にも精通しているので、炎の魔法などを放ってみたが、駄目だった。

そして、閉じこめられてから5日が経った。

突如、部屋にあった窓が開き、光り出した。

俺は何処かで、こんな現象を見た気がした。

何処だったか……。昔過ぎて覚えていない。

そう言えば、俺には幼少期の記憶がほとんど無い。

豪華な家に住んでいた、
 と言うのは、
 たまたま覚えていただけだ。

他にも、覚えていたくなかった事まで覚えている。

まあいいさ。

俺は窓から外に飛び出した。

プロローグ4 白銀（前書き）

【語り手】キヨン

結局、1日でプロローグ全部書くのは無理だったのさ！

ちなみに、タイトルの読みは“しろがね”です。

これで、語り手全員出たのかな？

次は、3人称で書かせていただきますね。

それでは、楽しんで下さい！

ブログ4 白銀

俺の名前は、キヨン。

当然、本名ではないぞ。

ただ、高校に入ってから、誰にも本名で呼ばれないから、自分でもそう名乗っているだけだ。

年齢は16歳、高校1年生だ。

通っている高校は、県立北高校。

クラスは1年5組。

ちなみに住所は、
○×かすみがはら県霞原町302番地である。

俺の所属している部活はSOS団。

涼宮ハルヒとか言うバカ野郎が作った部活であり、活動内容も意味不明である。

部員は俺とハルヒの他には、
愛しの朝比奈さん。

キモイ古泉。

頼りになる長門だ。

実はハルヒは、願望を実現する力があるらしい。

それを観察するために、朝比奈さんと古泉と長門がいるらしい。

3人とも違う組織の一員で、朝比奈さんは、未来の組織で、古泉は超能力者の集まり。

長門に至っては、宇宙人と来た。

ハルヒの無駄な能力のせいで、無茶苦茶な事に巻き込まれながらも、まあ、楽しい日々を送っていた訳だ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

さて、そんなこんなで、今日も妹に無理矢理起こされ、まだ寝かせろ、と思いながらも、朝ご飯喰わねーと、頭働かないしな、とか考えながら、ドアノブに手をかけた。

開かない。

.....。

何かの冗談だろ？

もう一度ひねる。

開かない。

俺は窓から飛び出した。

プロローグ5 劣悪（前書き）

【語り手】なし

遂に、プロローグ終了。

変な終わり方ですが、これで良いのです。（笑）

そろそろ、ホームページが形になってきました。

活動報告の方にURLを載せておきますので、

是非見てみて下さい！

それでは、楽しんで下さい！

プロローグ5 劣悪

「“まど”は開いた様だな……。」

顔が龍に似ている男が言った。

此处は、謎の研究所の様な場所である。

ほとんど真っ暗で何も見えないと言っても過言ではない。

男達が立っている場所の前に、巨大なモニターがあった。

それには、龍やカオス達の映像が映し出されていた。

「ほう……。予定通りに事が運ぶもんなんだな。」

マントを羽織った男が言った。

「ハッハッハ！予定通りに行くのもこれまでだろ。」

アイツらが、会っちまったら、計画は総崩れだぜ？」

額に鉢巻はちまきを巻いた、勇者の様な男が言った。

「そうだな……。虎視眈々と行くのはここまでだ。」

“？ Emperors PROJECT”を急ぐとしよう。」

龍に似ている男が言った。

「その通りだ。では、わたしは“デモナータ”に戻るとしよう。」

マントの男が言った。

「俺は……。聖剣“エクスカリバー”。

あれは、王が持つてても、何の役にも立たねえからな。」

勇者が言った。

「アレックス。聖剣は、この計画に重要な役割を果たす。
頼んだぞ。」

「分かってるよ……。真。」

どうやら、勇者の男はアレックス、龍に似ている男は真と言う様であつた。

「無論、デモナータも重要だがな、デッド。」

「それを私に言うか？ そんな事、承知の上だ。」

そう言うと、デッドは、研究所の奥に歩いていった。

「それじゃあ、俺も行くかな。」

アレックスが言った。

「頼んだぞ。」

「ああ。」

アレックスも研究所の奥に去っていった。

「お前達もこの計画の重要なピースなんだぞ・・・覇者達よ。」

真がモニターに映し出された龍達を見ながら言った。

【プロローグ 完】

第一話 沈黙の森（前書き）

【語り手】セイヴァー

遂に第一章突入！

ホームページの方も、dictionaryがオープンしました！

これからは、毎日更新を心がけたいと思っています！

それでは、お楽しみ下さい！

第一話 沈黙の森

【第一章 新世界】

「此処は何処だ・・・？」

俺は思わず呟いた。

辺り一面、森、森、森・・・。

「ん？」

その時、変な服を着た男達が歩いてきた。

「なんだお前は！？」

男達が俺に向かって呼びかけてきた。

「そりゃ、こっちの台詞だ。」

言ってやった。

「何だと！？この俺達に逆らうと言っのか・・・？」

男が言っている。

どうやら、俺の強さを知らねえ様だな・・・。

「お前等・・・殺すぞ？」

「ハア？一般人如きが……。
殺っちまええ！！」

リーダー格らしき男がそう叫ぶと、
後ろに居た全員が、腕に装着した謎の武器から、
液体の入った弾を飛ばしてきた。

ああ言うのに、当たるとロクな事にならないだろうな。

俺は、その謎の弾を飛んで避けてみせた。

「ほう……身体能力だけは中々の様だな。
だが、我々の“火ぶくれ弾”の餌食^{えじき}になる事に変わりはない！」

まだ、分からないらしいな。

「アンタ等の馬鹿さにはもう飽きた……。
一撃で片を付けてやるよ。」

俺は、剣を抜いた。

「この剣で……。」

俺は一瞬で、リーダー格の男の背後に回った。

「死ぬが良い。」

俺は、男の背中を斬った。

「グアアアアア！！！」

男が悲鳴を上げながら倒れた。

行くぞ・・・。

ジャキン！

ズバアア！

悲鳴。

悲鳴。

何かが切れる音。

「終わったな。」

ほんの1分後には、その場に居た数十人の死体が転がっていた。

「またつまらない者を斬った・・・。」

そう言つて俺が立ち去ろうとした時、

後ろから物凄い殺気を感じた。

誰だ！？

俺は思わず、剣を引き抜き後ろを向いた。

気付いたら、俺はそいつに向かって突進していた。

「探したぜえ・・・！デッドオオオオ！！！！」

俺は、デッドに向かって剣を振り下ろした。

だが、デッドは、剣を引き抜くと、軽々と受け止めた。

「お前では、俺には勝てない。

いつもは、冷静なお前でも、さすがに俺を見ると
熱くなる様だな・・・。ぜ・・・。」

「言っなあ！！」

「そんな名前は、もう捨てた。

俺はセイヴァーだ・・・。」

「そうか・・・。

ククク・・・。お前も重要なピースなんだ。
精々死なない様にな。」

そう言うと、デッドは消えた。

アイツの目的は何だ？

何故、今頃俺の前に現れたんだ？

そう思いながら、俺は森の奥へと歩いていった。

第二話 新たなる驚異（前書き）

【語り手】セイヴァー

これで一旦セイヴァーとはお別れです。
次は、龍ですね。

遂に版權キャラが増えてきましたが
気にしない方向でお願いします。www

それでは、お楽しみ下さい！

第二話 新たなる驚異

あれから、俺はどんどん森の奥へと進んでいった。

しかし辺り一面、森しかない。

それに音もしない。

不気味だな……。

その時、気配を感じた。

「誰だ……。出てこい。」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ……！！よく気付いたな……。」

森の奥から謎の男が姿を現した。

腕には謎の機械を装着している。

顔には、黄色いマークが書いてある。

入れ墨か？

「俺の名前は、鬼柳きりゅう 京介きょうすけ。」

“ダークシグナー”だ！アッハッハッハッハ……！！”

此奴……。狂ってんのか？

「お前は何をしに此処へ来た？」

「決まってるだろ……。てめえを殺すためだあ！」

そう言いつと、鬼柳は腕に装着していた機械からカードを一枚引き、機械にセットした。

「現れろ！“地縛神 C c a p a c A p u”！！」

鬼柳がそう叫ぶと、急に地面が揺れ始めた。

地震か？

「おい！お前何をした！」

「モンスターを召喚してやったんだよ……。
アヒヤヒヤヒヤヒヤ！！！！」

地面の揺れが収まったと思ったら、鬼柳の背後に巨人が現れていた。

おいおい……。何て大きさだ。

生えている木の数百倍ぐらいの大きさだ。

これを倒すのか……。

頭の中で戦闘法を計算した結果、やれない事もないが……。

「おい。死にたくなかったら、さっさと俺の前から消えろ。」

「ハア？地縛神を倒せると思ってるのかよお！？」

「倒せるさ……。」

俺は剣を構え、鬼柳に向かって突進した。

「バカだな！やれ、地縛神！」

鬼柳がそう言っていると地縛神が巨大な手を俺に向かって振り下ろしてきた。

思った通りだ。

体が大きい分、スピードがない。

避けるのなんざ、楽勝だ。

俺は横っ飛びをして地縛神の手を避けた。

「終わりだ……。」

俺は、鬼柳の頭に向かって剣を振り下ろした。

「くそお！」

鬼柳もどうやら死を覚悟した様だ。

呆気ないな……。
あつけ

その時だった。

「ぐああああ．．．」

俺は横から物凄い衝撃波を受け木々に激突した。

「ぐ、げほお、が．．．」

俺は、どんどん飛ばされていく。

ある程度ぶつかった所で止まった。

木が数十本折れている。

「無様だな．．．鬼柳 京介。」

「てめえは、“ペイン 天道”．．．だったか？」

「ああ。」

どうやら俺を吹き飛ばした奴は、ペイン 天道とか言うおかしな名前らしい。

ペイン．．．痛み？

「お前では俺には勝てない。諦めろ。」

「ふざけるな．．．」

そう言ったものの、どうやら肋骨^{あはじほね}が数本折れているらしい。

「ぐ．．．。」

痛みで意識が朦朧^{もうちろう}としてきた．．．。

「行くぞ鬼柳。」

天道が言った。

もう駄目だ、意識が．．．。

「ゼ．．．大．．．殺すな．．．。」

「はいはい。ゼム．．．も．．．アレ．．．と
手を．．．良いのにな。」

「そう言っな、鬼柳。」

俺は、そんな会話を聞いた後、気絶した。

第三話 現れる神（前書き）

【語り手】 カオス・ネクロフィア

何か急展開ですが、気にしないで下さい。

カオスとは、これでお別れです。w w w

第三話 現れる神

「おりゃああああ！！！！！」

俺は襲ってくる敵達を訳も分からず斬り倒していた。

え？この間、剣折ったじゃないかって？

その通り。俺が今使っているのはそこら辺に落ちていたナイフだ。

で、今俺に襲いかかってきている敵達の特徴と言えば、グロい。

何というか体の内部が見えている犬とか鳥である。

時たま攻撃を喰らう時もあったが、所持していた“回復薬”を飲んで辛うじて生き^{ながら}存えていた。

だが、アイテムのストックが終わるのも時間の問題だ。

「くそ・・・！」

俺は、そんな事を呟きながら敵を薙ぎ倒していく。

それにしても辺り一面霧だらけで前も見えない状態である。

気配が察知できるだけでも褒めてくれよな。

そんな時だった。

突然、化け物達の攻撃が止まった。

今だ・・・！

ジャキン！！

攻撃が止まった内に、辺りにいた化け物を全て倒した。

終わったか・・・。

「！！！！」

俺は背後に物凄い殺気を感じた。

今度は何だよ・・・。

そして後ろを振り向くと、そこには銀色の鎧に身を包んだ男が立っていた。

手には大剣たいけんを持っている。

「お前は・・・誰だ？」

「我が名はガーランド。」

“Gods of dead”の手先だ。」

重々しい声でガーランドが言った。

Gods of dead？なんだそりゃ。

「我々の目的・・・それは“世界を創る”事。
“新世界計画”・・・。」

「世界を創るだあ？ふざけた事、言ってんじゃねえぞ！
神気取りか？」

言ってやった。

「神“気取り”か・・・。
かってにそう思っていればよい。」

「どういう意味だ!？」

「神の力・・・見せてやろう。」

そう言うと、ガールンドは巨大な剣を持っているにもかかわらず
凄まじいスピードで俺に近づいてきた。

そして大剣を振り下ろしてきた。

冗談じゃねえ・・・!

俺は横っ飛びをして避けた。

ナイフじゃ勝てねえな・・・と思いながらも何とか攻撃を避けてい
た俺だった。

・・・グギッ”

足挫くじいた。

俺は思いつき横転する。

こりゃ死んだな。

何と、その時横から火の玉が飛んできた！

あれは・・・“ファイアボール”か？

まさか・・・マリオ！？

「よう・・・カオス。久しぶりだな！」

此奴の名はマリオ・マリオ。

“キノコ王国”の英雄である。

何でもその国の姫様である“ピーチ”姫を何回も救っているらしい。

だから英雄なのだそうだ。

当然かなりの実力者である。

勝機が見えてきたぜ・・・！

「あいたたた・・・。どうしたんだよ、マリオ。
て言うか此処、何処だよ？」

俺はマリオに聞いた。

「俺が聞きたいな……。お前は どうして此処に居るんだよ?」

「俺は気付いたら此処にいたんだ。
って……。来たぞ!」

話をしている内に、ガーランドが近づいてきていた。

ホントに此奴、何がしたいんだ?

「うらああああ!!!!」

ガーランドが剣を振り下ろす。

二人とも避ける。

そして、マリオがファイアボールを放った。

「そおおらああああ!!!!」

ガーランドは剣を振り回し、風を起こして火の玉を消してしまった!

あゝあゝ……。

「駄目じゃん、マリオ。」

「うるせえ。」

だが、そんなことを言っている場合ではない。

「マリオ!何か技無いのかよ!

俺は足挫いてて避けるのだけでもずきずきするんだよ!」

「足挫くお前が悪い!」

そう言うとマリオはガーランドに向かって走っていった。

「そりゃああああ!!!」

渾身のパンチを打ち込んだ・・・が。

「この鎧にそんなものが効くかと思ったか!」

ガーランドはダメージ一つ受けていない様で目の前にいるマリオを斬ろうとする。

「マリオオオオ!!!」

マリオは咄嗟に後ろに跳んだが、あのスピードじゃ間に合わない・・・!

と、またもや誰かが現れた。

「大丈夫か、アンタ!」

現れた少年――左手にルーン文字が浮かんでいて右手には剣を握っている――は

俺に向かってそう言うと、ガーランドの頭部を思いっきりけっ飛ばした。

「おおっ!?!」

バランスを崩しガーランドは後ろに倒れた。

「お・・・お前は一体？」

俺は少年に聞いてみた。

「俺か？俺の名は平賀才人。

伝説の使い魔“ガンダールヴ”だ。」

第四話 雷鳴の覇者（前書き）

【語り手】 高橋 龍

急展開その2。wwww

皆様、あけましておめでとうございます。

昨日は疲れてて文章が酷かったです
今回は結構頑張りました。

新年一発目としては中々の出来だと思います。

何と龍の兄が出てきましたね……。。

一体此奴は誰なのか……。。

それでは、皆さんお楽しみ下さい！

2010/1/2 改訂

龍の台詞とかを変えました。

プロローグ1も変えといたので

読まないと訳わかんなくなると思います。

第四話 雷鳴の覇者

「痛てて……。此处、何処だよ……。」

俺は気がつくのと、広大な草原に座っていた。

……。俺はアパートから飛び降りたはずだが？

「よう……。。」

後ろから誰かの声がした。

この声、どつかで……。

俺は立ち上がると振り向いた。

「!!!??」

そこには、兄貴が立っていた。

「兄貴!？」

「久しぶりだな……。龍。」

兄貴が言った。

「そりゃ、こっちの台詞だ。

何処、行ってたんだよ？

急に世界が危ないとか言い出して、覇者がどうたらこつたら……

とかさ。

姉ちゃんだって心配してたんだぞ！」

「龍・・・お前の力、見せてもらっぞ。」

「え？」

そう言うとき兄貴は右手を顔の前に翳^{かざ}した。

「はあああ・・・。」

何と兄貴に右手の甲に変な紋章が浮かび上がった！
なんだありゃ？

二つの剣が交差している紋章である。

「行くぞ・・・。」

兄貴が手を下ろし、目をつぶった。

すると兄貴は、いつの間にか剣を握っていた。

それも両手に。

「この計画には、お前が必要なんだ、龍。
お前は大事な欠片^{ピース}なんだ。」

「兄貴、なに言ってたんだよ・・・。
おかしくなっちゃったのか!？」

「龍、早く力を解放するんだ。
お前は自分の中の力に気付いていない。
さあ、“開放”しろ！」

兄貴がこっちに向かってくる。

剣を構えている・・・。

死ぬ。このままじゃ死ぬ。

何故か俺には、それが分かった。

まだ死ねない。

夢だっ て叶えてない。

兄貴が何で家出したのかも聞けてない。

何より・・・まだ死にたくない！

「おらあああああ！！！」

俺は無我夢中で叫んでみた。

「そうだ・・・それで良い。」

兄貴が立ち止まる。

俺の体から凄まじいオーラが出ていた。

目に見える。金色だ。

そして、右手の甲には兄貴と同じ紋章が浮かび上がった。

「目覚めたな……。」

“雷鳴の覇者” 高橋 龍。」

「兄貴……。これはいったい何なんだ？」

「覇者の証、とでも言っておこうか。」

さあ、バトル再開だ。」

兄貴がこっちに向かってくる。

こうなったら……。やってやらあ！

俺は兄貴がした様に目を閉じる。

右手に力を感じる……。

目を開いた。

あれ？右手にしか剣がない。

だが、兄貴は向かってくる。

やるしかない！

「だりやああ！」

俺は剣を振り下ろした。

しかし思った通り左手の剣で止められ、
右手に持っていた剣が俺を突き刺そうと襲ってくる
。

俺は地面を思いっきり蹴って跳んでみた。

「え？」

自分で驚いた。

あり得ない程ジャンプしている。

後ちよつとで雲に届きそうだ。

「やれるかしんねえ・・・！」

俺は空中から兄貴に向かって剣を振り下ろす。

「おらああああああ！！！！！！！！！！」

だが、兄貴は横っ飛びをして、いとも簡単にかわす。

「へへ・・・。どうやら俺は兄貴が思っているよりも
強かったらしいな！」

「お前が俺より強い？」

俺よりも勝っているとも言うのか？

勉強も運動も何も勝っていないのか？」

その言葉にイラッと来た。

「だったら・・・強さだけは俺の方が勝っていたって事だ。」

「その言葉・・・忘れるなよ？」

俺が最後に聞いたのはその言葉だった。

兄貴が目に見えないスピードで俺の眼前に現れる。

「くっ！」

後方に跳び退る。^{すさ}

が、兄貴がその動きについてくる。

「このストーカー野郎！」

俺は剣を体を軸に回してみた。

カキイイイイイン！

剣を飛ばされた。

「嘘だろ・・・？」

兄貴の剣が俺の体を貫いた。

「ぐ・・・。」

どうやら致命傷らしい。

意識が朦朧^{きうそう}としてくる・・・。

第五話 闇の到来（前書き）

【語り手】 龍の姉、龍の兄、高橋 龍

まさかの語り手追加。w w w

いや何かね、色々あつて追加したくなつたんだよ！

（理由を書くとき軽くネタバレになる危険性があります。）

話がちよつと絡み合ってきたのか・・・？

いや、まだだな。w w w

次回からちよつと絡み合わせたい・・・！

それでは、どうぞお楽しみ下さい！

[illegible]

「愚かだな．．．龍。」

自分の力を過信しすぎたのが敗北の決定的な理由だ。

「所詮お前はその程度だったのか……？」

俺と同じ血が流れていると言うのにな……。

正直がっかりだよ。」

とりあえず応急処置はしておいた。

これで死んでしまう危険性はないだろう。

死んだら里桜りおが悲しむ。

アイツの悲しむ顔は見たくない。

「これからお前がどれだけ強くなるか……それが、この計画の鍵となる。」

此奴がこれ以上強くなるとしたら
その引き金となるのは恐らく・・・。

「劣等感……か。」

俺は呟いた。

[illegible]

俺は目が覚めた。

まさか兄貴が……。

結局、兄貴には敵わなかった。

顔は瓜二つ。得意な教科も特技も好きな食べ物も嫌いな食べ物も一
緒。

俺の初恋の人は兄貴の好きな人だった。

55

勉強が得意、でも兄貴以下。

剣道だって上手い、でも兄貴以下。

俺は兄貴と比べられる事が多くなった。

親だって兄貴の事しか見てなかった。

他には・・・もう思い出したくない。

今でも引きずっている事すらある。

「くそぉ!!!!!!!!!!」

俺は地面をぶん殴った。

自分の非力さを恨んだ。

憎んだ。

俺は何のために生まれてきた・・・？

兄貴と比べられるため？

兄貴の方が勝っているという事を世間に知らしめるため？

何なんだよ・・・。

俺は立ち上がるとよたよた歩き出した。

行く宛など無かったが立ち止まっていたくなかった。

俺は俯うつむきながら歩き続けた・・・。

第六話 それぞれの邂逅（前書き）

【語り手】セイヴァー

まさかの二日更新せず・・・。

本当にすみません。――（――）――

昨日は用事がありました・・・。

一昨日は遊んでました。wwww

でカオスとセイヴァーはそれぞれ仲間を手に入れましたね。

次回に期待。wwww

第六話 それぞれの邂逅

⌋
⌈
•
•
•
○
⌊

目が覚めた。

出血が激しい。

くそ……。こんな所で死んでたまるか……。

だが、血は止まらない。

俺の人生も此処で終わるか。

まだだ……。俺は、まだ達成できていない事がある。

その為だけに俺は生きてきた。

だが、無理みたいだな・・・。

俺はまた意識を失った。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「大丈夫？」

俺は誰かから話しかけられた事で目覚めた。

・・・と言う事は生きているという事か。

助かった様だな。

「ああ。お前が助けてくれたのか？」

俺の目の前にいたのはピンクの髪の毛の少女だった。

何処かの学校の制服を着ているのだろうか？

「うん。森で倒れてたのを見て此処まで運んだの。」

「此処は・・・一体・・・。」

周りを見渡して気付いた事だが俺はどうやら小屋の中にいる様だ。

「ねえ、アンタ何処から来たのよ。」

少女が聞いてきた。

「それはこっちの台詞だ・・・と言いたい所だが、まあ良いだろう。
俺の名はセイヴァー、放浪者だ。お前は？」

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、貴族よ。」

貴族・・・？意味が分からんがとりあえず放っておこう。

「俺はある宿屋に泊まっていてな、そしたら
その部屋に閉じこめられてしまった...。」

と今までの経緯^{いきさつ}をルイズに話して聞かせた。

「へえ。」

とルイズは言った。

「そんな簡単に俺の言う事を信じてしまっただけなのか？」

「だって嘘ついてる様に見えるもん。」

・・・だそうだ。

「で、お前はどついう訳で此処に居るんだ？」

「あたしはね、学校で普通に授業受けてたの。」

「待て。その服装を見て思っていたがお前は何処かの学校の生徒か何かか？」

「そうよ。魔法学校のね。」

で、急に教室が物凄い光ったの。

思わず目を瞑^{つぶ}って、光が止んだと思って目を開いたら此処にいたの。」

「お互い、酷い目に遭っている様だな。」

「そうね・・・。」

ルイズが深刻そうに言った。

「ねえ、あんたはこれからどうすんのよ?」

「俺か?こんな所に用はないんでな。

此処から脱出する。」

俺がそう言つとルイズは

「無理よ。」

即答した。

「何故無理だと言える?傷を負っているせいかな?」

「私も脱出を計つて此処から一直線に進んだの。そしたら森からは抜けられたんだけど……。」

「だけど?」

「ドーム上のバリアで森を囲まれてて……。出ようとしても弾き飛ばされちゃった。魔法を使つて爆発させても駄目だったし。」

「……。万事休すか。」

「確かに無理の様だが、俺は行かせてもらつぞ。」

「どうしてよ?無駄じゃない。」

「やってみなければ分からない事もある。」

俺は小屋から出た。

するとルイズもついてきた。

「どうした？俺一人で十分だ。」

「魔物も出るのよ？傷を負った人をほおっておくなんて貴族の名が
廃るわ。」

こうして俺達は森からの脱出を計った。

第七話 不運（前書き）

【語り手】キヨン

語り手がキヨンだと結構書き辛いですね・・・。
やっぱ版權ものだからかなあ・・・。

て言うかプロローグ終わってからキヨン初登場じゃねえか。 W W W

無駄にリアルな撮影現場だな。

「おい。そこのお前、止まれ。」

銀色（？）の髪の毛をした男が俺に向かって屋根の上から呼びかけてきた。

「俺か？俺になんか用？」

「お前誰だ？忍者じゃない様だが・・・。」

「俺はキヨンだ。アンタ、誰だ？」

それにしてもホントにリアルだな。

緑色のベストを着ている。

「俺は、はたけカカシだが・・・。
まさかお前はスパイか？」

「え？ちよつと待て、これはまさか撮影中か？
俺が他局の奴か何かかと思ってるのか？」

「他局？お前は何を言っているんだ？」

どうやら違う様だ。

「怪しいな・・・。火影様の所へ連れて行くか。」

そう言つとカカシはいきなり俺の腹をぶん殴りやがった！

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「で、火影様。此奴がキヨンとか言う奴です。」

俺は今、火影とか言う女の前に突き出されている。

何がどうなってるんだ？

「ふむ。特に能力も持つてなさそうだからな・・・。

おい、キヨン。お前は此処に何しに来たんだ？」

「俺が聞きたいぐらいだね。自室の窓から飛び降りたら此処にいたんだよ。」

「不可解だな・・・。仕方ない、お前に任務をやってもらう。」

はあ？

「おいおい・・・。さっきカカシも言ったが、もし俺がスパイだつたらどうするつもりだ？」

「それを見極めるためだ。

此奴を第七班に帰属させる。ナルトとサクラを連れてこい。」

「分かりました。」

そう言つとカカシは一瞬で消えた・・・。

Year	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099
1990	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099

って、ナルトはさっき屋根を走ってた奴じゃないか。

「綱手のばあちゃん！任務って何だってばよ？」

「此奴の事かつてばよ。」

人を指さすな、人を。

どうやらサクラは常識人の様だ。

「此奴はキヨンと言つんだが、何でも

自分の部屋の窓から飛び降りたら此処にいたそつだ。

「へ？」

ナルト達が驚く。

「アツハツハツハハ、ハヤハヤヒヤヒヤハヤjヒオldkッds。」

ナルトが腹を抱えて大笑いしている。

「綱手様。それは本当ですか？」

「それが分かんのだ。なので、敵国のスパイかも分かん。だから、此奴の強さからそれを推測してもらう。」

「成る程。それで具体的には何をすれば良いんだってばよ？」

ようやく笑い止んだ様だ。

「ああ。まあ何だって良いんだが・・・。
とりあえずカカシと組み手でもしてみたらどうだ？」

「お！それ良いってばよ。そろそろ戦ってみたいと思ってた所だし
！」

「サクラはどうだ？」

「私も賛成です。」

「よし、お前等サバイバル演習場に集合だ。
ちゃんと、キヨンと一緒に来るんだぞ。」

そう言つとカカシは何処かに行つちまつた。

「じゃあ行きましよう、キヨンさん。」

第八話 降臨せし邪神（前書き）

【語り手】高橋 真

頑張って書きました。www
結構、物語の核心に触れてますね。

3つの団体も出てきましたし・・・。
これからにこうご期待。

第八話 降臨せし邪神

俺は果てしない草原を歩いてた。

龍の手当てをして歩き出してから早3日だ。

その間、俺は何も口にしていないが特に問題はない。

「……ゼムナスか。」

「よく気付いたな、真。」

ゼムナスが背後から近づいてきた。

「気配は完全に殺していた筈だが？」

「俺にそんなものが通用すると思っていたのか？」

「フ……。そうだったな。お前には何も通用しない。お前の正体を知っているのは誰が居たっけな。」

「お前の他には……アレックスとデッドだけだな。」

俺の正体……。俺は消える事が出来ない。

永遠に生き続ける。

「何の用だ？」

「いや・・・私の部下の鬼柳がね、お前と手を組めとか言ってきたんだよ。」

「俺と手を組め・・・？そいつは俺の目的を何か勘違いしていないか？」

俺の目的・・・いやこの計画と言った方が正しいな。」

この計画・・・？ E m p e r o r s P R O J E C T。

その目的は世界征服なんかじゃない。

「ああ。だが改革の全貌を彼奴に話してしまっただろうかと思っとな、

一応聞きに来てみたのだ。」

「よく俺が此処にいる事が分かったな。」

「なあに、こちらの技術力を持つてすれば
全世界に張り巡らすリーダーを作る事など容易い。」

「俺達の場合は組織自体が小さいからな。
覇者達の居場所を探るリーダーで精一杯だ。
全員で3人だぞ？」

「それでよく組織と言えるものだな・・・。

それもそうだ。

「そう言えばお前達の目的は何だったっけな。」

「それこそ世界征服だ。その為に全世界から指折りの者達を集めている。」

「何故……。お前は世界征服を企む？」

聞いてみた。

「私は存在していない者だと言う事は知っているな？」

「ああ。確かノーバディ……。だったか？」

「その通りだ。私は“キングダムハーツ”を手に入れ完全な存在になりたいのだ。」

「そういえばそうだったな……。そこまで聞いた覚えがある。だがそれはお前一人の問題だろ。それに何故他の奴等が協力するんだ？」

「“キングダムハーツ”にはまだ見ぬ何かがある。知識の宝庫があるのかも知れない。力が眠っているのかも知れない。」

未だかつて多くの人間が“キングダムハーツ”の謎に挑んでいた。だが、誰一人としてそれを解き明かした者はいなかった。」

複雑な話だ。

「何故……。誰も解き明かした者がいないんだ？」

「“キングダムハーツ”には番人がいるのだ。」

「番人・・・？」

「そのことを話すには“キングダムハーツ”とは何かを話さなければならぬのだが・・・。」

「もういい。頭がぐちゃぐちゃになってきた。」

“キングダムハーツ”か・・・。

俺も調べてみよう。

「そう言えば私たちとお前達の他にもう一つ組織があるらしいな。」

「ああ・・・。Gods of dead だろ。」

「それだ。そいつらの目的・・・知っているか？真。」

「知らん。」

俺が知ってる訳無いだろう。

「あくまで風の噂だが・・・何でも“邪神”と呼ばれる神を呼び出すのが目的らしい・・・。」

「邪神・・・だと？」

アイツらと呼び出すつもりか？

だが、それは不可能なはずだ。

アイツらは封印の間に閉じ込めてあつたはず・・・。

仕方ない。三幻神の奴等に言っておくか。

「それだけだ。それ以外は知らん。」

「そうか、ありがとよゼムナス。」

“D I S S I D I A”に幸運を。」

「“E m p e r o r s”に幸運を。」

そう言つとゼムナスは消えた。

さあて・・・基地に戻るか。

俺はまた歩き出した。

第九話 闇の力（前書き）

【語り手】カオス・ネクロフィア

さあ遂に絡んできましたね。

まず、まさかの真登場。

何となくノリで出していました。orz

時系列としては、これは龍に会った後です。

読んでれば分かると思いますが・・・。

いや、分らないな。www

そしてサイレントヒル。

これはセイヴァーがいた所です。

・・・って小説本編には一言も書いてないな。www

dictionaryを参照して下さい。

今回はキョンVSカシですね。

どうやらカシは本気で襲いかかってくる様だ。

コマンド？

第九話 闇の力

「そらあああ！」

俺達は今、ガーランドと凄まじい戦いを繰り広げている。

・・・とは言ったものの俺は足を挫いているからはっきり言ってもしていない。

マリオと才人が頑張っている。

攻撃方法は、まず才人がガーランドに突進する。

それを受け止められたらマリオがガーランドの背後からファイアボールを放つ、
と言うありがちなものであった。

「無駄だと言っているのが分からないか！」

この攻撃方法をさっきからずっと続けているが、まともに攻撃が当たらない。

才人の剣技はガーランドがかわしてしまうため、意味がない。

たまに受け止めてくれるものの、ファイアボールはガーランドの鎧には通用しないのだった。

「どうする？もう万策尽きたって感じだぜ？」

才人が言った。

「せめて俺が“変身”出来れば・・・。」

マリオが言った・・・って変身!?

「お前、変身なんて出来たのか!？」

「まあな。帽子を変えれば色々出来るんだ。
キノコを食べても良いしな、花を食べたりとかも。
後、星を食べたりとか・・・。」

「何か凄い能力だなあ。」

才人が感心した様に言う。

「って、そんな話をしている場合じゃないな。
どうやってアイツを倒すんだ？」

「今の俺達の戦力では勝つのは不可能と言っても過言ではない。
此処は逃げるのが一番だが、おとなしく逃がしてくれるかどうか・
・・・。」

そう言っただけ俺達はガーランドを見る。

息切れすらしていない。

何て体力だ。

「どうした？もう終わりか。」

言ってくれるねえ。

「さあ・・・終わらせてやろう!」

ガーランドが近づいてくる・・・。

その時だった。

俺達の後ろから誰かが飛び出した。

剣を持っているから才人か？

いや違う。

飛び出した男(?)は両手に剣を持っている。

「お前は・・・!」

ガーランドはそう言うも気にせず突進してくる。

そして男に剣を振り下ろす。

だが、その男は右手に持っていた剣で受け止め左手の剣でガーランドの鎧を斬った。

何と鎧に傷がついた!

「くっ・・・!お前は確か高橋 真、Emperorsの首領だったか?」

どうやらこの男は高橋 真と言っらしい。

助けてくれた所を見ると味方なんだろうか？

「なあ真とやら。お前は俺達の味方なのか？」

「……どうだろうな。」

なんだそれ。

「お前がいずれ出会う事になる高橋 龍……
そいつの兄だという事だけ覚えておけ。」

「高橋 龍？誰だそりゃ？」

全く知らん名だ。

「あ、それともう一つ。お前は“覇者”だ。
そのことを自覚しておけ。」

「は……しゃ？」

覇者？

またもや、なんだそれ。

「いずれ分かるだろう。もう龍は“開放”したぞ。
カオス・ネクロフィア。」

「え！？何で俺の名前知ってんの？」

「全て分かる時が来る。近いうちにな……。
さて、今お前に死なれては困る。

此処は俺に任せてさっさと逃げろ。」

「逃げろったって霧だらけで方角すら分かんないし
此処が何処かも分かんないよ……。」

才人が言った。

「此処は“サイレントヒル”。
今俺が来た方向にまっすぐ進むと変な扉があるはずだ。
その中に入れば別の世界に転移できる。」

「別の世界……？転移？」

「良いからさっさと行け！」

そうこう話している内にガーランドが近づいてきていた。

こうなったら真の言う事を信じるしかない。

「お前は一体誰なんだよ！」

走りながら聞いた。

「高橋 龍の兄。それだけだ。」

「アンタからは凄まじいオーラを感じるんだが……本当にそれだ

「けか？」

今度はマリオが聞いた。

「俺の本当の正体は……。それもいずれ分かる。」

真がガーランドと剣を交えながら言った。

とりあえず俺達は真に言われた通りの方向に走っていった。

[illegible]

あつた。

実際に雇はあった。

「さて……これの事か？」

ん？今のは才人でもマリオの声でもないぞ？

まさか・・・新しい敵か？

「おい！みんな敵がいるぞ！」

マリオが身構える。

「いや違う違う。そう言えば言っ てなかったな。今は俺の剣が喋ったんだ。」

「剣が喋った!？」

俺とマリオが驚く。

「ああ。“デルフリンガー”って言ってさ。

俺はデルフって読んでるんだけど。

何でも意識がある“魔法剣”だった……かな。」

「そうだぜ、相棒。」

デルフが喋った。

「お前等よろしくな！」

剣が喋っている……が、どうやら夢ではない様だ。

「そう言えば何でマリオ達はこんな所にいたんだ？」

「ああ、それは……って扉の中に入ってからにしようぜ。」

マリオが言った。

それもそうだ。

「罾かも知れないぞ。」

才人が言う。

「でも他に術はないしな……。よしみんな行くぞ！」

俺達は扉を開け未知の世界へと踏み出した。

第十話 陰謀（前書き）

【語り手】キヨン

思ってたよりも書けました。w w w

結構、話が絡み合ってきました。

で、ペインが出てますが時系列で行くとこれはセイヴァーの後です。

次回は恐らく龍君とカオスが・・・？
お楽しみに。o r z

第十話 陰謀

俺は今、サバイバル演習場とか言う所にいる。

「良いか？お前等。殺す気でかかってこないと俺は倒せないぞ。」

カカシが言った。

上等だ。

ぶつ倒してやるぜ。

「その言葉、もう聞き飽きたってばよ！」

ナルトが言う。

「前は私たちに負けましたよね、先生？」

サクラも言う。

「今回は万華鏡写輪眼も使わせてもらう。」

「えええええつえええつえええつえ！？」

ナルトとサクラが叫ぶ。

「カカシ先生、それは酷いってばよ!？」

「いや、本気でやらないと負けちゃうからね。」

それにキヨンの強さも見なけりやいけないし。」

「そう言えばキヨンさんの力を見るための組み手でしたね。」

忘れててくれれば良かったのに。

「じゃあ行くぞ。今回のお前等の任務は俺を倒す事。

俺に“まいった”とでも言わせてみる。

よい、スタート！」

始まった。

いきなりカカシが俺に向かって跳んできた。

え？俺、何も出来ないぜ？

どうやらカカシは俺が忍者か何かだと思ってるらしいが
あいにく
生憎、一般人である。

「雷切！」

そう言うとかカシの右手に電気のようなものが現れた。

「ちょっと待ってくれ！俺は何も出来ないんだ！」

だがカカシは止まらない。

しょうがないので、ちょっと横っ飛びをしてみたが
すぐに軌道を変えられ意味がなかった。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

周りを見渡してみたが俺はベッドに横たわっていた。

て言うか、あの状況で何故生きてる？

さつき五代目火影とか呼ばれてた女が俺に近づいてくる。

確かに心臓を貫かれたはずだが。

凄まじい技術じゃないか？

「いや逆にこちらは謝るべきだな。」

ただ、もうちょっと強いかなと思ってな……。

酷い話だ。

「俺はただの一般人です。

宇宙人でもなけりや超能力者でもない。

それに未来から来た訳でも・・・

いや、待てよ。まさか俺は過去に來ているのか・・・？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

五代目が俺に問いかける。

「何でもないです。

ところでカカシ達は・・・？」

「ああ。アイツ等ならもう任務中だよ。

“ 暁 ” の奴等が目撃されてな。」

暁・・・？

「あの・・・暁って何ですか？」

「・・・。知らないのか。」

知らんに決まってるだろ。

「そうか・・・。お前は一体何処から来たんだ？」

やっとその質問かよ。

「前も言った通り俺は自分の家の窓から飛び降りたら、ここにいたんです。」

それ以上でも以下でもないですよ。」

「ふむ……。」

で、暁と言うのはだな……。」

「暁なんてのは、もう存在しませんよ。」

ん？今のはまさか……？

俺は咄嗟に声のした窓の方を向く。

思っていた通りの男がそこにはいた。

「こ……古泉!？」

こんな所に来てまで学生服来てやがる。

「知り合いか？」

五代目が俺に聞く。

「まあそんなもんです。」

「知り合いとは失礼な。」

僕とあなたの仲じゃないですか。」

「うるせえ。」

古泉が俺の方に近づいてくる。

「何で・・・お前がここにいる？」

「我が“機関”がある組織と手を組みましてね。
確か名前は・・・。」

「DISSIDIA」。
それが我々の名だ。」

今度は違う声がした。

入り口の方からだろうか？

で見ると今度は知らん男が立っていた。

なんか赤色の雲が斑まだらに描いてある服を着た男であった。

「その服装は・・・暁！？
それにお前は・・・弥彦だったか？」

「弥彦は死んだ。俺は“ペイン”。
ペイン 天道・・・痛みを与える神だ。」

暁に機関にDISSIDIA。

もはやついて行けない。

「結局の所お前の目的は何だ・・・古泉。」

「僕の目的はあなたの“抹殺”ですよ。」

「俺も同じだ。」

ペインとか言う奴も言った。

俺を殺すと何になるって言うんだ？

「あなたを殺す事で涼宮ハルヒに何かしらの影響が出ると判断した。」

また変な声がしたぞ。幻聴か？

だがそれは幻聴なんかじゃなかった。

いつの間にか俺の目の前には長門が立っていた。

「長門！？お前まで俺の敵かよ、おい！

それに読心術まで覚えてやがるのか！？」

「情報統合思念体の方々もDISSIDIAの一員ですからね。それと朝比奈みくるの組織も一員です。

あなたには味方などいないのですよ。」

何て事を言いやがるんだ此奴は。

「大丈夫ですよ。DISSIDIAの中でもあなたを殺す事にあまり乗り気ではない方々が居ますからね。

その人達が今、此処に来る事を願ってはとうですか？」

ウザいな。

「生憎だが此処で此奴を殺させる訳にはいかないんだな。
リーダーの命令でね。」

今度は頭に鉢巻を巻いた男が現れた。

もう病室は満帆だ。

誰か出てけ。

「おいキョン。」

「何で俺の名前を知ってるんだ。」

気持ち悪い奴め。

「色々あるんだよ。」

その火影様を連れてさっさと逃げな。
後ナルトとサクラとカカシだったか？
そいつ等もつれてけよ。」

何でそこまで知ってるんだ。

「俺は此処で此奴等を足止めする。
ほら、さっさと行け！」

そう男が行った途端、古泉達が一斉に俺に向かってきた。

冗談じゃないぞ、おい。

「此処は行きましょう！五代目。」

「くそ・・・！」

だが周りを囲まれて逃げられない。

て言うかかわせないと此処でアウトだ。

そんな事を思っていると男の左手に二本の剣が描かれている紋章が浮かびあがった。

「おらおら行くぜえ！！！！！」

男がそう言うが早いかいつの間にか剣を握っていた、両手に。

そして俺達の間に入ると剣を振り回す。

「く・・・！」

ペイン達の動きが一時的に止まった。

「今だ！」

男が叫んだのを聞いて俺と五代目は病室を抜け走り出した。

第十一話 重なる運命（前書き）

【語り手】高橋 龍

やっと絡んできましたね。

そして度々登場、真兄さん。

次回は遂に真兄さんの恐るべき力が龍達に襲いかかる！
為す術は・・・ない！？

第十一話 重なる運命

結局、俺はあれから何処に行く宛もないので歩き続けていた。

そろそろ疲れたな・・・休むか。

そして俺は立ち止まり地面に座った。

しかし三日三晩、歩き続けているのだが何も見えてこないな・・・。

バリン！

あ？何だ今の音。

何か上の方から聞こえたが・・・。

そう思い俺は上を向いた。

何だありゃ？

人が落ちてくる。

三人も。

俺の真上に。

・・・。

やばい！！！！

俺は咄嗟に今、居る場所から動いた。

数秒後、俺の居た場所に男が三人叩き付けられた。

「痛てて……。ん？此处、何処だよ。」

青いジャージを着、背中に剣を背負^{しょ}っている少年が言った。

「アイツの言う事を信じてドアを潜^{ひそ}ってみれば……。」

Mと言う文字が入った赤い帽子を被っている男が言う。

「まさか空から落ちる羽目になるとは……。」

最後は……。特に特徴のない男が言った。

「おい……。アンタ達、一体何者だ？」

聞いてみた。

当然だろ？

「俺は平賀 才人。赤い帽子の奴がマリオで、もう一人の奴が力才
スだ。お前は？」

「俺は高橋 龍だが……。アンタ達は何してたんだ？」

「高橋 龍……。もしかしてお前の兄は高橋 真かい？」

マリオが聞いてきた……って兄貴！？

「何でアンタ達が兄貴を知ってるんだよ!？」

何処で会ったんだ!？」

「どうやらアイツの言っていた事は本当だった様だな……。」

カオスが言った。

「どういう事だ？」

そして俺は力オス達のこれまでの経緯を聞いた。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「アンタ達はサイレントヒルって所で兄貴を見たのか。」

でも俺もこの間、会っただけだな……。

「そんな一瞬で移動出来るのか？」

「と言うよりは此処が何処かが問題の気がするがな。」

マリオが言う。

「確かに。サイレントヒルとは全く違う景色だしな……。」

才人も言う。

「兄貴……姉ちゃんだって心配してるんだぞ……」

俺がぼそつと言つと、

「龍には姉もいるのか？」

とカオスが聞いてきた。

「ああ。まあ義理の姉だけだな。」

「と言う事は兄の妻って事か？」

才人が聞いてきた。

「そう言う事だ。」

“兄の妻”か・・・。

もう・・・諦めたつもりだったんだがな・・・。

「どうしたんだ？龍。」

マリオが聞く。

「いや・・・何でもない。」

「何でもないはないだろう、龍。」

まさかこの声は・・・。

俺が見た先には兄貴が立っていた。

「馬鹿な……。まさか、あのガーランドを倒してきたのか!？」
才人が驚く。

「倒してはいないが何とか振り切ったって感じだな。
今は戦う気分じゃなかったからな。
さて龍。

お前は……。里桜が好きなんだろう？」

!?

「いきなり何言い出すんだよ……。
姉ちゃんは兄貴の奥さんだろ？
俺が好きになってどうすんだよ。」

「お前の初恋の相手は里桜だ……。違うか？」

「……。何でもお見通しして訳か。
ああ……。俺は姉ちゃんが好きだった。
でも、もう……。」

「いや、まだお前は諦めきれていない。
心の何処かでお前は俺から奪い返そうとしている。
里桜だけではない……。全てをな。」

何を言い出すんだよ……!」

「何が言いたいんだよ……。」

「お前は俺よりも劣っている事を自分で認めている。」

だが心の底ではそれを認めきれていない。
いい加減、諦める。その方が楽にな・・・。」

「おい、てめえ。本気で言ってるのか？」

才人が言った。

「てめえが良くても龍が良くなきゃ意味無いだろ。
全てがお前の思う通りにいくと思うなよ。」

「それが、いつてしまっただよ。残念がらな。」

「どういう事だ？」

カオスが聞く。

「さっきも言っただろう。いずれ分かると。」

「俺はお前の態度が気に入らねえ。
俺達と戦え。」

！？

「何、言ってるんだよ才人！
それで何の解決になる？」

「俺達の力でアイツを倒す事が出来れば・・・
アイツの意味の分からない言葉の意味が追求出来るかも知れない。
それに龍だつて・・・本当はぶっ倒したいんじゃないのか？」

「倒せたら苦労しないぜ……。」

その時、才人が俺の胸倉を掴んだ。

「やってもいねえのに諦めてんじやねえぞ！

一回やってみてそれから考えやがれ！」

……。

俺はまだ……まだ諦めたくない！

俺は手に力を込めた。

すると右手に描かれている紋章が輝き剣が現れる。

その光景に三人は目を丸くした。

「見たか？カオス・ネクロフィア。

これが“開放”だ。」

「行くぞ！兄貴！！」

俺は兄貴に向かって突っ走る。

後ろから才人とマリオも付いてきた。

「だが……“覚醒”していないお前等では俺には勝てん。」

そう言うとき兄貴は右手の紋章を輝かせ二本の剣を出現させた。

「今回は俺も本気を出させてもらおう。
そしてお前達に・・・絶望を味わってもらおう。」

第十二話 歴然の差（前書き）

【語り手】 高橋 龍

うわぁゝ・・・眠い。

と言う訳で、とてつもなく眠いのでかなり酷い無い様になっっている希ガス。

また書き直すかも知れません・・・。
マジで眠いんで・・・スミマセン。

第十二話 歴然の差

まずはマリオがファイアボールを飛ばした。

だが兄貴は逆さに持っている左手の剣を振り回し、いとも簡単に火を消した。

「これなら、どうだ！」

次は才人の剣技。

今度は右手の剣で止められた。

そして後からついてきたカオスの斬撃。

なんと兄貴は体をうまく捻って攻撃をかわしやがった。

最後は・・・俺だ！

俺は高く飛び上がり兄貴に向かって剣を振り下ろす。

「無駄だ・・・！」

そう言った瞬間、兄貴の体から凄まじいオーラが湧き出てきて、少し距離を開けていたマリオ以外の全員が吹き飛ばされた。

「ぐあああ！」

俺達は地面に叩き付けられた。

「何だ・・・今は？」

カオスが言う。

「今は“覚醒”していれば誰でも使えるんだぞ・・・。
まあ“覚醒”出来るのは“覇者”だけだな。」

「“覇者”・・・。」

「龍。お前は“雷鳴の覇者”だ。
カオスは“混沌の覇者”・・・。
そしてお前等の他にも覇者は居る。」

“覇者”ねえ・・・。

どうやら結構、数は居るみたいだな。

「さあ・・・お喋りは此処までだ。
行くぞ・・・！」

気付くと兄貴が目の前に居た。

俺は空に向かって蹴飛ばされ今、浮かんでいる。

そこに兄貴が追撃を加えようとジャンプしてきた。

やばい・・・！

そう思ったが横から才人もジャンプし兄貴の妨害をした。

「やらせて、たまるか！」

「俺がそんな事も予想出来ていない思ったか？」

「何？」

「甘い……。見せてやろう、俺の技を……。
“やみしぐれ闇時雨”！」

兄貴は空中で俺と才人の周りを行ったり来たりしながら斬り付けていく。

それも目に見えない速さで、だ。

俺達は血だらけになり空中から地面に落ちていく。

「才人！龍！」

マリオが思わず叫ぶがいつの間にかマリオの目の前には兄貴が居た。

「な……。！？」

「遅い！」

そう言いマリオにも“闇時雨”を喰らわせた。

マリオも倒れる。

そして俺と才人は地面に叩き付けられる。

残るのはカオスだけだ。

「くそっ・・・！」

こんな所で負けてたまるかよ！」

そう言い兄貴に向かって走っていく。

「うらあああああ！！！」

「大サービスだ。もう一つの技を見せてやるよ。」

そう言うと兄貴の右手の紋章が輝き、なんと三本目の剣の絵が追加された。

絵が描かれるのが早いか兄貴の持っていた二本の剣が空中で合体し、一本の剣となった。

「カオスソード”での一撃・・・。一瞬で終わりだ。

“カオスブレイク”！」

兄貴はその“カオスソード”とやらを思いっきり振った。

俺が気付いた時にはカオスが消えていた。

何があっただんだ？

「カオスブレイク”・・・。

それは空間を切断し別次元へと飛ばす技。

フッフ・・・。だが、あまりにも強力過ぎ、俺でも一日一発が限

度だな。」

何てこった。

カオスは別次元へと飛ばされてしまった。

第十三話 並走（前書き）

【語り手】セイヴアー

久々に書いたら何か指があまり動かず、ちょっと短くなってしまう
ました・・・。

申し訳ありません・・・。

第十三話 並走

あれから数日が経った。

結局、未だにこの謎の空間の端まで辿り着けていない。

「ルイズ……お前は本当に辿り着いたのか？」

「当たり前じゃない。まだまだ道のりは長いわよ。」

との事であつた。杞憂だつたみたいだな……。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	52
--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

今、俺達はある男と対峙している。

両手に鍵の様な形の剣を持った男である。

だが真つ黒なコートを着ていて、しかもフードを深く被っているのでもしかすると女なのかも知れない。

だが体格的に……女なのかも知れない。

「お前は一体誰だ……。」

「俺はロクサス。お前が……」
“天空の覇者”
か。」

喋り方からして男だろうな。

・・・それよりも天空の覇者とは何だ？

「ねえセイヴアー。アンタって“天空の覇者”とか言っやつだったの？」

「そんな訳あるか。俺は唯の・・・。」

ルイズに正体をばらす訳にもいかないな・・・。

「唯の何よ。」

「人間だ。」

とりあえず、そう答えておこう。

「で、お前は俺達に何の様だ？」

「アンタ達の力量を試しに来た。ゼムナスからの命令だ。」

「何？本当に“番人”を倒す力があるのか・・・それを見極めさせてもらう！」

そう言うところクサスがこっちに向かってきた。

「ルイズ！あの爆発を使い！！」

それにしても“番人”って何なんだ？

「分かったわ！」

此処まで一緒に戦ってきて分かったのだがルイズは
相手を爆発させる魔法しか使えないらしい。

何か意味があるのだろうか？

「行くぞ！ “天空の覇者”！！」

ロクサスは右手に持っている剣——よく見ると剣先が“光”と言う文
字に見える——を

俺に向かって振り下ろしてきた。

俺はそれを愛用の剣で受け止める。

そこに今度は左手の剣——こちらは“闇”と読める——を俺に向かって
振ってきた。

だが俺は、それを間一髪で避ける。

「中々やるね……。」

ロクサスが呟く。

「そりゃどうも。」

そして今度はおれから攻撃を仕掛ける。

体を一回転し遠心力を付けてロクサスに斬り掛かる。

だが右手の剣で受け止められた。

「ルイズ、今だ！」

「エクスプロージョン！！！」

そう、これが俺達の作戦である。

俺が敵を引きつけている間にルイズは魔法を詠唱しておき隙を見て魔法をぶつける、と言う戦法だ。

「ぐああああ！！！！！」

ロクサスは爆発に巻き込まれ吹っ飛んだ。

もちろん俺も爆発を喰らったものの、もう慣れっこだ。

それに、ちゃんと予測してたため受け身も取れた。

「くそ……。だけど“天空の覇者”自体の戦闘能力は、まだまだだね……。」

よしゼムナスに報告しとこう。」

そう言うとロクサスは消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1621j/>

UNBALANCE

2011年10月9日21時56分発行